

シューベルトと〈ロマン主義〉の生成
——マイアホーファーとシラーの美学的交叉をめぐる——
堀 朋平

フランツ・シューベルト（1797～1828年）の音楽様式は、作品受容や友人関係といった外的要因に影響されつつ変遷した。外的要因の大きな区切りによってその様式変化を区分する見方は、研究者のあいだで主流な見解のひとつであり続けている。すなわち、作曲家の依存の対象が、既存の体制から親密な友人サークルに変わった1817年ころ、シューベルトの音楽は、斬新な和声や実験的な形式構想によって顕著な〈突出的瞬間〉がきわだつ傾向を全般的に示し始め、これと関連しつつ、歌曲のジャンルでは現実からの離脱と彼岸への憧憬という特徴がきわだってくる。これらの特徴を本稿は〈ロマン主義的〉と呼ぶ。この特徴は、1824年ころから、均整のとれた形式的全体や公共性への志向を特徴とする〈古典主義〉に座を譲ることとなる。

2つの理念型の変遷は、しかし個別に詳論されなくてはなるまい。この点で、J. マイアホーファー（1787～1836年）の存在は豊かな示唆を孕む。「教化育成」を重んじて論考を書きつづけた彼であったが、1817年頃からの詩作には「彼岸」志向が目立ち始める。この二極性は、連作詩集『太陽の都』（草稿1821年）できわめて明瞭に主題化された。おそらくF. シラー（1759～1805年）による2編の美学論への回答として構想されたこのテキストは、北国と南国、無人島での瞑想、Kunstの両義性といった同時代的トポスに依拠しつつ、「実践」と「救済」をめぐる強い緊張感を描きつつも、結局は南方の王国への一瞥を荒れ果てた北国へと投げ返し、理想の王国の現実的完成——すなわち〈古典主義〉——を強調することで閉じられる。

この詩集に基づくシューベルトの4つの歌曲（1816～1822年）には、上記の両義的思想が顕著な音楽的表現を見ており、その諸特徴は、件の二極をめぐる変遷を読み解くための重要な鍵となる。